

北の大地

平松 夕佳

【登場人物一覧】

【日本のある村】

聾（セイ・100歳）…とある村に住み着いている地狐

人間の姿に化けられる

レラ（12歳）…とある村の少女。病気がち

女子高生（17歳）…神となったセイを何故か視える謎の女子高生

【ウスケシ（現…函館付近）のある村】

ミナ（17歳）…コシャマインの村で治療師をしている

コシャマイン（推定50代）…ウスケシの村長

ヒシルエ（30代）…コシャマインの妻

ウタリアン（20歳）…コシャマインの息子

シャナ（15歳）…ミナの付き人

【蝦夷地に逃げてきた者】

安東政季（推定40代）…南部氏との争いに敗れ、蝦夷地に身を隠す

北海道の実権を握る男

武田信広

（コシャマインを倒した時は27歳）…安東と共に蝦夷地に渡る

花沢館の蠣崎季繁と共に上ノ国を守る

【あらすじ】

時は室町時代。

差別もなく、とても平和な村があった。

その村に住み着いていた地孤のセイは、病氣がちのレラとその村に村の人々に助けられながら、平和に過ごしていた。

ある時、村人たちにちよつかいを掛けに来た地頭の怒りを買い、レラが殺されてしまった。

レラの遺体から、何が入っているかわからない小さい袋と、見たことがないネックレスを拾い、村人達に尋ねると、レラのお父さんが持っていた形見だという。更に、レラのお父さんは、ウスケシという、遠い北の和人からは蝦夷地と呼ばれる場所から来たそうだ。

レラのお父さんが見た景色、レラが見たかもしれない景色をみるために、一人ウスケシへと旅立ったセイ。

ウスケシまでもう少しというところで、雨に降られ、船が横転し、溺れてしまう。気を失ったセイは、ウスケシの浜辺で、コシャマインの村人たちとミナという不思議な力を持つ少女に助けられる。

コシャマイン達に温かく迎え入れたセイは、ミナやコシャマインの息子・ウタリアン達と共に、アイヌの様々な文化に触れていく。

しかし、一年前に起こった、和人がシノリ村の青年を殺傷する事件をきっかけに、和人たちに対する不信感が募っていた道南のアイヌの人々は、コシャマインを筆頭に、和人に対して、戦を挑もうとしていた。

死ぬとはわかっていても、治療師として戦に参加しようとするミナと口論になるも、戦へと向かうミナたちを送り出したセイ。

道南に十二もあった和人の館を次々と倒していく。

一年が経ち、残り二館となったころ、花沢館に身を寄せていた武田信広に七重浜まで追いやられ、ミナ、コシャマイン、ウタリアンが死亡。

死体として村に帰ってきた、ミナ達をみて悲しみに暮れていたセイだが、シャナに連れられ、あの世に繋がる洞窟でミナと再会する。

そして、元いた村に戻り、この地を守る神様となって、レラとの約束を果たす。

○暗い森の中

T「1454年8月」

息を切らしながら全力で走る安東政季、政季の妻、
武田信広、政季の妻の御付きの2人。

木に足を引っかけてこける政季の妻。

全員走りを止め、安東氏の妻の方を見る。

安東氏の妻に駆け寄る政季、御付き2人。

政季「大丈夫か！」

倒れている妻の肩に手をかける安東氏。

安東妻「大丈夫です…。」

妻の腕を肩に回し、起き上がらせる安東氏。
安東氏「もうすぐだからな。少しの我慢だ。」

か細い声で

安東妻「ありがとうございます。」

再び歩き始める。

○津軽海峡

奥に薄く北海道が見える。

ボラードに繋がられている船。

全員船の方に走り、順に船に乗り込む。

○海

魯で船を漕ぐ武田。

御付きの女、安東氏の妻に着物をかける。

妻の肩に手を置く安東氏。

その手に手を添える安東氏の妻。

蝦夷地を見つめる2人。

蝦夷地に向かって進む船。

星が輝く夜空。

○とある村

T「1456年5月」

夕方ごろ

田植えをする村人たち。

馬鍬を使って牛に犁を引かせ田起こしをする村人。

野菜を収穫する村人。

あぜ道で蝶々を追いかける子供たち。

子供たち「わーー」

飛ぶ鳥。

田植えをしている村人母と子。

村人子「今年もいーっぱいお米とれるかな！」

村人母「そうだねえ。お天道様にお願いしようか」

村人母子が太陽に向かって

村人母子「お天道様…」

○田んぼから100mくらい離れたところ

田んぼに向かって馬が走る。

○戻って

村人母子「今年もお米がいっぱいとれま…」

親子の前で馬が止まる。

見上げると、馬にまたがる地頭が村人母子をにらみつける。

地頭「おい、何を話しておる。はよ苗を植えんか」

地頭をにらみ返す村人母。

地頭「なんだその顔は。文句があるなら言ってみろ」

不安そうな顔で母の後ろに隠れる村人子。

村人母「何でもありません。さあ、お前田植えをやるよ」

村子「う、うん」

馬を降りながら

地頭「さっさと働け」

横から石が飛んできて地頭の頭に当たる。

地頭「いっ」

頭を手で押さえながら、石が飛んできた方を見る地頭。

地頭「何者だ」

田んぼから30mほど離れた場所でボロボロになった着物を着ている
レラが地頭を怒った顔で見つめる。

レラ「田植えの邪魔をしているのはお前の方だ」

地頭「貴様、私が誰だかわかったの無礼か」

レラ「それがなんだ！困っている人を助けただけじゃないか」

周りの村人もくすくすと笑う。

腹を立て、刀を少し抜く地頭。

慌てて

村人母「刀を収めください、地頭様」

地頭「…。チッ」

馬に乗りながら

地頭「お前たちもさっさと働け」

来た道を帰る地頭。

親子の前にしゃがみ込むレラ。

レラ「大丈夫だったか？」

村人母「余計なことをして。切られたらどうするんだい」

キョトンとしながら

レラ「そんなことを考えてもみなかった」

ため息を吐く村人母。

村人母「そんなことよりあんた、熱は治ったのかい？」

レラ「おかげさまで」

村人母「良かったよ。後で野菜を届けようと思ってたところだったんだ」

レラ「お。今日は何をくれるんだ」

村人母「今日は：そら豆と白瓜だな」

村人子「僕がとってくるゝ」

家の畑の方に向かう村人子。

その姿を微笑ましく思うレラ。

村人母「どうだい。病み上がりだけど気分転換に田植え手伝ってくかい？」

レラ「すまん。今日は久々に遊んでくる。」

村人母「最近知り合った子だったけか。」

レラ「そうだ。」

村人母「この辺に住んでるんか？」

誤魔化そうと良い訳を考えるレラ。

レラ「…」

村人母「…？」

村人子OFF「レラちゃん」

両手に沢山のそら豆と白瓜を持っている村人子。

村人子が野菜を渡しながら

村人子「はい」

レラ「こんなにいいのか?!」

村人子「うん！お友達にも渡してあげて！」

心配そうに村人母を見つめるレラ。

村人母「持って行っておやり」

自慢げに

村人子「僕が大切に育てたんだから天下第一美味しいよ！」

村人子の頭を撫でながら

レラ「ありがとう」

村人母「今度その子を紹介してよ」

レラ「うん。言っておくよ」

じゃあっと山の方に向かうレラ。

手を振りながらレラの背中を見送る二人。

○山の中

木をかき分けながら歩くレラ。

セイを見つけて走りながら

レラ「聒！」

祠の前で立っているセイ。

振り返る。

ニコニコの笑顔で

セイ「レラ！」

レラ「お待たせ！」

セイ「すっかり熱が下がって良かった」

レラ「もう完全復活！」

セイ「アハハ」

レラの手を握りながら

セイ「レラに見せたい場所があるんだ」

レラを引っ張りながら

セイ「ついてきて！」

レラ「うん！」

○山の中／頂上

並んで走る二人。

狐の姿になり走るセイ。

セイ「こっちを右！」

右に曲がる二人。

セイ「レラは本当に足が速いね」

レラ「おとう譲りの自慢の脚力だよ。この脚力でどんな事からも逃げきってやるんだ」

セイ「アハハ」

二人で楽しそうに走る。

セイ「ついたよ！」

木々から光が漏れ出る。

レラ「∴。わぁ∴」

○山の中／頂上

崖の下に湖が広がる。

レラ「こんな所あったんだ∴知らなかった」

満足そうに笑うセイ。

セイ「今日は満月だから夜までここで待とう」
レラ「うん。」

レラのお腹が鳴る。

恥ずかしそうに照れるレラ。

クスクスと笑うセイ。

懐からおにぎりを出すセイ。

セイ「じゃーん」

レラ「おにぎり！これセイが握ったの？」

セイ「ううん。お供え物」

レラ「アハハ！」

懷から白瓜を2つ出すレラ。

レラ「じゃーん！」

セイ「白瓜！」

レラ「村の子がくれたんだ。天下一美味しい白瓜だって」

セイ「アハハ」

座る二人。

おにぎりとお瓜を交換する。

セイ・レラ「いただきます！」

○同

日が落ちすっかり辺りは暗くなる。

空を見ながら並んで寝ているレラとセイ。

レラ「本当にきれい。いつも見てる空と変わらないのに、今日は一番綺麗に見える」

セイ「喜んでくれてよかったよ」

レラ「何か今日の満月も少し青く見えるね」

セイ「ほんとだ」

流れ星が流れる。

空を指しながら

レラ「流れ星！」

セイ「え！どこどこ」

流れ星がまた2回流れる。

空を指しながら

レラ「ほらまた！」

セイ「また見逃した」

残念そうな顔をするセイ。

セイを見て笑うレラ。

レラ「流れ星に願うとその願いが叶うらしいんだ」

セイ「じゃあ次こそは見ないと」

見逃さまいと空を凝視する二人。

流れ星が流れる。

目をつぶる二人。

セイ「願えた？」

レラ「うん」

セイ「何を願った？」

レラ「身体を強くしてこの村の皆を守れるようになりますように」

レラ「セイは？」

セイ「この村を守るくらい立派な狐になりますようにって願った」

レラ「同じだね。」

微笑み合う二人。

セイ「じゃあ。いつかこの村を2人で日本一幸せな村にしよう」

指切りをする二人。

レラ「約束」

○祠の前へ里

翌日

狐の姿で祠の横で寝ているセイ。

微かにレラの叫び声が聞こえる。

セイ「レラ?!」

山から里へ降りる。

辺りを見渡すが誰一人村人がいない。

セイ「まだ明るいのに何で誰もいないんだ」

辺りをキョロキョロしながら歩く。

息を切らしながらセイの肩をつかむ村人母。

村人母「お、おまえさん。ハアハア」

驚いた顔で村人母の方を見るセイ。

セイ「あなたは…」

村人母「レラが！レラが悪党にさらわれた」
セイ「!?」

別の村人達が集まってくる。

村人母「地頭の野郎が悪党どもを引き連れてきたんだ。

あいつ、昨日恥をかかされた腹いせにレラを連れてったんだ。
みんな怖くて助けられなかった…」

村人みんな下を向く。

セイ「レラはどこに連れていかれましたか？」

村人母「レラはあっちの山に入ってた」

時間はまだそんなに経っていない」

村人A「でも相手は悪党だ」

村人B「あんたまで何されるかわからないよ」

セイ「大丈夫。今こうしている間にレラが危険な目にあっているかもしれない。
ありがとうございます。教えてくれて」

村人らにお辞儀をして山の方へ走るセイ。

走るセイを見送る村人ら。

○山の中

狐の姿で山の中を走るセイ。

セイM「お願いだ。間に合ってくれ」

木々にぶつかりながら、倒れている木を飛び越え走るセイ

セイ「…！レラの血の匂い」

更に加速する。

少し開けた場所に出る。

人の姿に戻り

セイ「レラ！」

悪党に囲まれてレラが頭から血を流して倒れている。

悪党ら振り向く。

悪党A「ああ。なんだおめえ」

怒りに満ちた表情になるセイ。

じりじりと悪党らに近づくセイ。

セイ「おのれ：よくもレラを：」

耳と尻尾が生える。

セイの姿を見てギョツとする悪党ら。

悪党B「ば、化け物！」

逃げ出す悪党ら。

凄い速さで悪党Aの前に行き胸倉をつかむセイ。

爪を立てる。

悪党A「お慈悲をくだせえ。お慈悲をおお」

セイ「レラは凄く苦しんだんだ。悪いことは何もしてないのに。そんな理不尽なことはないだろう」

より一層恐怖に満ちた顔になる悪党A。

悪党A「あ。あ。あ。」

悪党Aの叫び声が響く。

○里

セイの帰りを待つ村人たち。

遠くでセイの姿が見える。

村人母「レラー！！！」

セイのところに走る村人たち。

血まみれのレラを見て絶句する村人たち。

村人母「あんた：」

下を向きながら

セイ「間に合いませんでした」

泣き崩れる村人たち。

セイ「レラの小屋の近くに埋葬しようと思います」

村人B「あんたも傷だらけじゃないか。先に手当をした方が…」

食い気味に

セイ「傷なら勝手に治ります。穴を掘るのを手伝って下さい」

うなずく村人達。

○レラ的小屋

レラの両親の墓の横に穴を掘る村人達。

レラを抱きかかえて麻で編んだ簡易的な棺に入れるセイ。

涙を流すセイ。

セイ「レラとしたいこと、話したかった事、いっぱいあったのに。
もう一回、いつもみたいにセイって言って笑ってくれよ…。レラ…」

泣き叫ぶセイ。

セイの涙がレラに落ちる。

泣く村人達。

村人母「…。」

レラの棺に蹴鞠を入れながら

村人子「いつも遊んでくれてありがとう。
向こうでもこれで遊んでね」

薬草を入れながら

村人母「向こうで風邪をひいても困らないように」

沢山の茄子と大根を入れながら

村人A「レラちゃんの好きだった茄子と大根。向こうでも沢山食べるんだよ」

棺の中に村人たちが各々持ってきた物が入れられる。

棺の蓋を持ち、涙を流しながら

セイ「レラ。こんなに沢山のお土産貰えて良かったなあ。

こんなにも愛されてレラは幸せ者だな。
レラの願いは僕が叶えるから。ありがとう。レラ」

蓋を閉じる。

しゃがんでレラが埋まっている土の上に白い彼岸花を供えるセイ。

目をつぶり手を合わせる。

ポケットからレラの持っていた袋とネックレスを取り出す。

セイ「レラが持っていました。これが何かわかる人はいますか？」

村人全員のぞき込む。

ハツとする村人D。

村人D「それ、レラのおっとうさんがもったやつでねえか」

村人C「そうだな。レラのおっとうが、この村にやってきた時からもったやつだな」

セイ「レラのおっとうさんは、この村の人ではないのですか。」

村人母「そうだ。もう15年くらい前だけどな、ドッサという音がして、振り返ると、人が倒れているんよ。しかも見たことのないは織物をした。それで、一旦千代の家に運んで看病したんだよ」

村人E「その千代ってのは、レラの母親なんだよ」

村人母「レラのおっとう、名前はアンラインといってね、病気がちだったみたいだね、中々、外に出てくることはなかったんだが、いつも家の中から挨拶してくれるいい人でね。

千代もあまりあの人のこと話さなかったからね」

村人F「おら、千代からアンラインの話聞いたことあるぞ。」

アンラインの住む街はウスケシという場所で、ずっと北の海を渡った所にあるらしい。

自然豊かな場所です、とても美しい文化を持っていると聞いた」

村人母「もしかしたら、その首飾りはウスケシという場所で作られたものかもしれないな。」

セイ「ウスケシ…」

手に持った装飾品を見つめ、ぎゅっと握るセイ。

セイ「教えていただき、ありがとうございます」

○レラのお墓の前

翌朝の明け方

旅支度をしたセイがレラのお墓の前に着く。

お墓の前にしゃがみ、白い彼岸花を交換する。

セイ「レラ、僕はレラのお父さんが住んでいたウスケシという場所に向かうよ。ここからふた月ほどかかるらしい。ここに戻ってくるのも何年後かわからない。毎日来れなくなるけど、レラはここから私のことを見守っていてほしい」

名残惜しそうにお墓を見つめるセイ。

立ち上がり

セイ「いってきます」

里の方へ向かって歩き始める。

○里

山から下りるセイ。

村人達を見つけ、驚くセイ。

村人らが外に出てセイを待っている。

村人らに駆け寄りながら

セイ「皆さん。朝早くにどうしたんですか」

村人母「あんたに渡すものがあったね」

背中に隠してあるかごに入れた漬物と魚の干物をセイに渡す。

村人母「はい。これ」

それぞれセイに持ってきたものを渡す村人ら。

驚くセイ

セイ「…いいのですか」

村人母「みんな心配なのさ」

村人F「これくらいあれば当分は困らないだろう」

嬉しそうな顔をするセイ。

セイの袖を引っ張る村人子。

村人子の方を見てしゃがむ。

村子「これ、お守り」

藁でつくった手のひらサイズの狐のぬいぐるみを渡す村人子。

セイ「…！ありがとうございます」

村子「レラちゃんの墓守は任せて」

微笑んで、村子の頭を撫でるセイ。

ニッコリ笑う村人子。

立ち上がるセイ。

セイ「みなさん。本当にありがとうございます」

村人母「こっちは大丈夫だから」

安堵の顔をして

セイ「はい。いってきます」

手を振って見送る村人達。

歩きながら村人らに手を振り返すセイ。

○森林

薄暗い明け方

太陽が昇る。

まぶしくて手で目を隠しながら

セイ「あっちから太陽が昇るといことは、方向はあっているな」

嬉しそうに微笑んでまた歩き始めるセイ。

○拓けた道へセイの旅路

お昼過ぎ

小川を見つけ、水を飲む。

近くの木陰でおにぎりともらった漬物を食べる。

少し離れた所にある畑で、ボロボロの服を着た女の子と男の子が辺りをキョロキョロと見渡している。

何かを察して氣配を消し近づくセイ。

畑の野菜を盗もうとする二人。

セイOFFF「君たち」

驚いて動きが止まる二人。

恐る恐る振り返る。

セイ「盗みは見過ごせないな」

すぐに

弟「ごめんなさい」

姉「ちょっと、逃げるよ」

弟の手を取り逃げようとする姉の手を掴むセイ。

セイ「これ持っていき」

おにぎり二つと白瓜二つを渡す。

姉「いいの…?」

セイ「うん。美味しいよ」

にこっと微笑む。

姉「お兄ちゃんありがとう!」

弟「ありがとう!」

キラキラした目で喜ぶ二人。

二人の頭を撫でるセイ。

嬉しそうに歩く二人の後ろ姿。

レラとの思い出が重なる。

ぼそっと

セイ「レラ。僕たちの夢に一步近づけたかな」

再び歩き始める。

夜になり木の根元で寝る。

翌日

お昼ごろ茶屋で団子を食べる。

木の棒を地面に立てて影の方角を見る。

○津軽（陸奥国北部）

明け方

交易が盛んで、蝦夷と呼ばれる人々が国外から運びこまれた
アザラシやラッコなどの珍しい動物の毛皮、鮭などが運ばれてくる。

珍しさにキョロキョロ辺りを見るセイ。

少女OFF「ねえ」

声がする方を見るセイ。

少女「何か探してるの？」

セイ「ウスケシという場所に行きたいんだ」

少女「ウスケシ：あつ。海の向こうに見える陸がそうだよ」

海の向こうを指さす少女。

少女「お前さんこの辺りの人じゃないじゃろ。ウスケシってアイヌの
言葉じゃのに何で知ってるだ」

セイ「友達のおとうがウスケシから来た人だったて」

少女「それは珍しい。アイヌの人々がこっちに住むのはあまりないんだ。

村でも追い出されたんか？」

セイ「それはわからないけど…」

少女「ふーん。まあそんなことはどうでもいいんだ。向こうに使ってない舟ある
からそれで行ぐといいよ」

セイの手を引っ張る少女。
少女「こっち！」

○同／舟着き場

舟を指さす少女。

少女「あれ使っで」

舟に近づく二人。

舟に乗り込むセイ。

舟につながれている縄を外す少女。

少女「海流にのっていけば着けるよ」

セイ「ありがとう」

セイに手を振る少女。

○海の上

500m以内で、ウスケシに着く辺り。

星が輝く夜。

寝落ちしそうになりながら舟を漕ぐセイ。

雨が降ってくる。

セイ「雨だ…。早く行かなければ」

より一層、力を入れて漕ぐ。

強い風が吹く。

波が突然高起し、バランスを崩すセイ。

セイ「わ。わ。」

船がひっくりかえる。

海に放りだされる。

溺れかけ、狐の姿になり泳ぐ。

また波が高起する。

海水を飲み込み、上手く水面へ上がれない。

息ができず、ごぼつと泡を出す。

段々意識が遠くなる。

セイM「ここで…終わりたいくない…」

気を失うセイ。

○ウスケシの海岸

村人が浜で気を失っているセイを見つける。

コタンA「おい。人が倒れてるぞ。」

騒がしい声に一瞬意識が戻るセイ。

コタンB「早くミナ様の所に連れて行け」

視界がだんだん閉じてくる。

○ミナの子セの中

T「1456年7月」

お昼ごろ

ガバツと起き上がるセイ。

辺りをキョロキョロする。

セイ「ここはどこだ」

壁に飾ってあるアイヌの伝統的な服を見つめる。

熊の毛皮で作った布団をどかして、壁に飾ってある服の方に近づく。
セイ「レラの家にあった服と似てる…」

部屋を開けるミナ。
ミナOFF「起きていたのか」

ミナの方をじっと見て警戒するセイ。

笑顔で近づくミナ。

ミナ「そんな警戒するな。取って食ったり、毛皮にしたりはしない」

驚いた表情でミナを見つめる。

机にお水を置くミナ。

ミナ「よく眠れたか？」

うなづくセイ。

セイ「お陰様で」

安堵の表情を浮かべるミナ。

ミナ「そうだ。君に3人ウェンカムイ（悪霊）が憑いていたから祓っておいたよ。」

セイ「え？」

シャナOFF「ミナ様。患者様がいらっしゃいました」

部屋の前に立つシャナ。

ミナ「わかった。すぐ向かう」

お辞儀をして部屋を去るシャナ。

セイ「お前は医者なのか？」

ミナ「医者とも言えるが…。知りたかったら私について来るといい」

部屋を出るミナ。

お水を一気に飲んでミナの後を追うセイ。

○医務室

骨折して右足首が異様に曲がってる子供Aが足を伸ばし座っている。

骨折した部分が紫色に腫れ上がって、血だらけの足。

心配そうに見つめる母A。

子供Aの前に座るミナ。

ミナの後ろで絶句するセイ。

母A「木に登っていたら足を滑らせてしまつて」
ミナ「ああ。これはひどいね」

泣くのを我慢する子供A。

苦しそうに

子供A「痛い…」

ミナ「すぐに治してあげるから、少しだけ我慢するんだ。」

骨折した部分に片手を添えるミナ。

目をつむり深呼吸をする。

しばらくすると、骨折した部分の徐々に腫れが治おり、元の形に戻る。

驚くセイ。

骨折した部分が完全に治る。

目を開け、手を引込めるミナ。

ミナ「終わったよ。足を動かしてみな」

恐る恐る足首を動かす子供A。

子供A「痛くない…。痛くないです！！！」

嬉しそうに足首を動かす。

拝み、頭を下げながら

母A「ああ。ミナ様。ありがとうございます。」

子供A「ミナ様。ありがとうございます！」

笑顔で頭を下げる子供A。

ミナ「今度は気をつけるんだ」

子供Aの頭を撫でる。

ニッコリ笑う子供A。

○チセの外

親子を見送る三人。

ミナに手を振る子供A。

頭を下げて家へと向かう親子たち。

手を振り返すミナ。

ミナ「シャナ。この後皆をチセの集めて、セイを紹介をしようと思うんだ。」
シャナ「今、コシャマイン様たちはユク（鹿）狩りに言っておりますので、

帰ってきたら、お伝えいたします」

ミナ「よろしく頼んだ」

シャナ「では失礼します」

一礼してミナの元を去る。

シャナを目で追うセイ。

ミナOFF「では、行こうか」

ミナを追うセイ。

○ミナの部屋

部屋に入る二人。

床に座るミナ。

ミナ「座って話そうではないか。」

ミナの前に座るセイ。

珍しい数々の装飾品に辺りをキョロキョロするセイ。

ミナ「珍しいか？」

セイ「そうだな。倭国の物とは違うな。でも、この模様の服は親友の家にあった」

ミナ「ほう。それは珍しい」

セイ「親友の父がウスケシという地域に住んでいたと聞いた」

ミナ「ウスケシはこのことだが」

セイ「∴。そうか。辿り着けたのか」

ミナ「でも珍しいな。そっちに住むものはあまりないのだが」

黙るセイ。

セイ「さっきの治療、凄い力だな。奇跡って本当にあるんだな」

爆笑するミナ。

ミナ「奇跡か…。そんなことはない。ちゃんと代償はある」

セイ「代償…？」

自分を指さすミナ。

ミナ「それは、力を使うたびに自分の身体が衰えていくことだ」

セイ「…」

ミナ「私の右耳は聞こえないし、左目も視えない」

セイ「そんな代償を払ってまでもなぜ人の為に治療をするんだ」

ミナ「…少し昔話をしようか」

ミナ「元々私は、別のコタン…。村に住んでいたんだ。

私の村は、他の村とも離れていて、川からも遠かったから私たち家族しか住んでいなかった。それでも、何不自由なく暮らしていた。

でも、ある時アチャ…。父がカムイタシユム、君らの言葉で言う痘瘡と言うのかな？病に倒れたんだ」

○（回想）ミナの昔住んでいたコタン／チセの中

5歳のミナと母親が天然痘で伏せている父親の体を仙台蕪の煮汁で拭く。

窓に行者ニンニクが掲げてある。

泣きそうな顔をして

ミナ幼「アチャ…」

ミナ父「心配するな。大丈夫だ」

ミナの頬を撫でる父。

ミナ母「ミナが毎日看病してくれてるで、大丈夫よ」

ミナ幼「…うん！」

ミナ（OFF）N「それでも父の病状は治らなかった」

○（回想）セイが流れ着いた浜

二か月後

ミナ父「行ってくるよ」

父を抱きしめるミナ。

ミナ父「すぐに戻ってくるよ」

うなずくミナ。

ミナ父「ごめんな」

ミナ母「大丈夫。だからパコロカムイにみつからずに早く帰ってきて」

うなずくミナ父。

船を漕ぐミナ父を見つめる2人の後ろ姿。

○戻って

ミナN「あれっきり父が帰ってくることはなかった。そしてほどなくして母もカムイタシムで倒れた」

○（回想）ミナが昔住んでいたコタン

チセで寝込むミナ母。

薬草をチセの中に運ぶミナ。

ミナ幼「ハポ…」

ミナ母「大丈夫よ…」

半年後

母親の墓の前で手を合わせるミナ。

○戻って

ミナ「それから程なくして私もカムイタシムになったんだ。遠くなっていく意識の中、死にたくない強く願ったら、何故かこの力が使えていた。

それから、狩りでケガをした人達をこの力で助けながら生活をしていった。それでケガをされたコシヤマイン様を手当したら、この力を買われんだ」

セイ「そうなのか…」

ミナ「あのまま一人で居ても野党にこの力を無理やり使わされていたかもしれないし、コシヤマイン様と出会えたのはこの力が使えるようになったくらい奇跡なんだ」

セイ「…」

ミナ「そういえば君の名を聞いていなかったな」
セイ「聾」

ミナ「セイ。よろしく。私はミナ。セイらの言葉で笑うという意味だ。
私の笑顔が好きだったから、この名前を両親が付けてくれたんだ」

ニツコリ笑うミナ。

ミナの笑顔を見てつられてニツコリ笑いながら
セイ「確かに」

ミナ「ありがとう」

シヤナ「ミナ様。コシヤマイン様達が帰ってこられました」

ミナ「わかった。セイ。行こうか」

セイ「うん」

部屋を出る二人。

○コシヤマインのチセ

夕暮れ

コシヤマインのチセの中に入るミナとセイ。
ミナ「コシヤマイン様。お待たせいたしました」

コシヤマイン含め、村人全員が炉を囲む。

コシヤマイン「おお。元氣そうで良かった」

セイ「助けて頂き、あ、ありがとうございました」

お辞儀をするセイ。

コシヤマイン「私は、コシヤマイン。隣が私の妻のヒシルエ」

微笑むヒシルエ。

コシヤマイン「こっちが息子のウタリアン」

ウタリアン「ウアムキリアンナ」

きよとんとするセイ。

ミナ「よろしくって」

セイ「よろしく」

冗談交じりに

コシヤマイン「このコタンは、私たち一族と身寄りのない者と一緒に
暮らしているんだ。セイも暫くの間ここにいと良い。」

なんならここでずっと過ごしても良いからな」

セイ「お氣遣いありがとうございます。皆さん。よろしくお願いします」
皆に向かってお辞儀をするセイ。

微笑む村人たち。

窯で温めたウレハル（熊の足裏の肉）を器に入れ、セイに渡す
コシャマイン。

コシャマイン「これは、歓迎の印だ」

器を受け取るセイ。

セイ「いただきます」

食べたことない美味しい味に目を開くセイ。

セイ「とっても美味しいです」

コシャマイン「今年仕留めた熊のここ（足裏を指さす）だ。

三日三晩煮込み続けるんだ」

ミナ「ウレハルはね。珍しいお客に振る舞うご馳走なの。

キムンカムイが授けてくださった今年一番おいしいお肉だよ」

味わって食べるセイ。

コシャマイン「そうだ。ヒシルエとミナ。サロルンリムセを

やってあげたらどうだ」

ミナ「それは名案ですね」

ヒシルエ「みんな。準備しましょうかね」

女性陣が一斉に立ち、準備をする。

キヨロキヨロするセイ。

ヒシルエ含めた4人とミナを含めた6人に分かれる。

ヒシルエが鶴の声の真似をする。

その他は手拍子。

ミナ達が二重に着たルウンペを鶴の羽のように動かす。

ヒシルエ達が、歌い始める。

サロリンリムセを始める。

見入るセイ。

コシヤマイン「どうだ？美しいだろ」
セイ「はい…。とつても」

舞うミナに見入るセイ。

○同

皆の笑い声。

ご飯を食べながら笑い合う皆。

コシヤマイン「そういえば、セイは何でこんな所に来たんだ。」

セイ「死んだ親友のおとうがここから来たと聞いて、親友が見るはずだった景色
を見たくて来ました」

コシヤマイン「素敵な理由だな」

セイ「ありがとうございます。でも、本当は親友も来れたら良かったのですが」
ミナ「…」

コシヤマインが立ち上がり、部屋の奥から取ってきたルウンペをセイに
渡す。

コシヤマイン「昨日完成したんだ。これを着なさい」

受け取り、ルウンペを着るセイ。

コシヤマイン「これでお前もアイヌだ」

セイ「ありがとうございます」

○コシヤマインのチセの外

コタン子供達「コシヤマイン様たちアプンノシニヤン！（おやすみなさい）」
コシヤマイン「アプンノモコロヤン。みんな」

手を振りそれぞれのチセに帰るコタンの子供たち。

ミナ「コシヤマイン様アプンノシニヤン」

コシヤマイン「アプンノモコロヤン」

コシヤマイン「セイ。アプンノモコロヤン」

セイ「アプン、ノ、モコロ、ヤン？」

笑うコシャマイン達。

こそっと

ミナ「セイ。アプンノシニヤン！」

たどたどしく

セイ「あっアプンノシニヤン」

手を振ってミナのチセに戻るミナとセイ。

止まって後ろを振り返るセイ。

コシャマインがチセの横の檻で飼われている子熊を撫でている。

熊を見て身震いするセイ

ミナ「セイ？」

セイ「なんでもない。」

○ミナのチセ

ミナ「セイ。アプンノモコロヤン」

セイ「さっき僕がコシャマイン様に言った言葉」

ミナ「コシャマイン様くらいの年齢の人に言うのと、死んでくださいって意味になっちゃうの」

くすくすと笑うミナ

頭を抱えながら

セイ「：何てことを：」

セイの頭を撫でながら

ミナ「難しいよね」

セイ「：」

ミナ「セイはシサムだから仕方がないよ」

セイ「シサムって？」

ミナ「私たちの言葉で倭国の人たちのこと」

セイ「言葉もこんなに違うんだな」

ミナ「そうだね。海一つ隔ててるだけなのに」

セイ「そういえば、ミナもコシャマイン様も何で倭国の言葉がわかるんだ？」

ミナ「ウスケシは倭国との交易が昔から盛んなんだ。ここからは少し離れているけどシサムの人たちの街があるよ」

セイ「今度行ってみたいな」
ミナ「…うん」

× × ×

ミナ「今日は楽しかった。最近、物騒なことがあってシサムを警戒していたから、コシャメイン様がセイのことを気に入ってくれて良かったよ」

キョトンとするセイ。

ミナ「アプンノモコロヤン。おやすみ」

セイ「おやすみミナ」

○セイの部屋

ルウンペを脱いで木で吊るす。

床に寝る。

ポケットからレラの形見を取り出し掲げてから胸に当てる。

セイ「レラ。ウスケシに来れたよ。ありがとう。そっちで元気にしてる?…。
おやすみ」

○コタン

翌朝

厠から出てくるセイ。

ウタリアンOFF「セイ」

狩りの道具一式を持ったウタリアンがセイを呼び止める。

セイ「えっと…」

ウタリアン「ウタリアンだよ。ウタリって呼んでくれ」

セイ「おはよう。ウタリ」

ウタリアン「一緒に狩りに行かないか?」

セイ「行きたい!」

ニコツと笑い、弓と槍をセイに渡す。

ウタリアン「槍の先は毒が塗ってあるから気を付けて」

怖がるセイ。

笑って

ウタリアン「行こうか」

○裾野付近

木々をかき分けて登る2人。

息が切れないセイ。

ウタリアン「セイ、息切れてないな」

セイ「少し疲れたけどね」

ウタリアン「もう少しだから」

登り続ける二人。

目印のあるところをウタリアンが通過。

ウタリアン「セイ、そこ仕掛けがあるから危ない……！」

セイ「え？」

仕掛け矢が飛んでくる。

くの字で避けるセイ。

ウタリアン「大丈夫か！」

セイ「……なんとか……」

ウタリアン「良かった……伝えるのが遅かったな。すまん」

セイ「ハハハ……」

苦笑いをするセイ。

再び登る2人。

○同／鹿狩りスポット

ウタリアン「ここだ」

足を止める2人。

ウタリアン「セイ。こっち」

風下の草むらに隠れ、息をひそめる二人。

イパツケニ（鹿笛）を吹くウタリアン。

しばらくすると、奥の方から雄鹿が、現れる。

狙いを定めて、

ウタリアン「∴」

鹿の首に向かって矢を放つウタリアン。

鹿を仕留める。

バタバタする鹿だが、しばらくすると動きが止まる。

鹿に近づき、死んでいることを確認してから弓を抜く。

鹿を首に乗せる。

ウタリアン「次はセイ。ここにはもう鹿は来ないと思うから。こっち」

別の場所に向かう二人。

別の鹿スポットに到着。

ウタリアン「ここだ」

風下の草むらに隠れる二人。

ウタリアン「セイ。さっき私がやったみたいに吹いてみて」

イパツケニ（鹿笛）を吹いてみるセイ。

しばらくする角が顔面に下がった雄鹿が現れる。

弓を構えるセイ。

セイの弓を押えて

ウタリアン「あれはダメだ。食べたら體が溶ける」

草むらから出て鹿を追ひ払う。

ウタリアン「残念だけど、今日はこれくらいにしよう」

山を下る二人。

○コタンに近づいていく道中

ウタリアンOFF「セイ」

歩みを止めるセイ。

指を指すウタリアン。

奥の方に白兔が草を食べている。

ウタリアン「いけるか？」

セイ「兎は得意」

息を殺して兎に少しずつ近づくセイ。

ある程度近づいて、弓を構えるセイ。

兎の首元目掛けて弓を打つ。

兎に弓が刺さる。

ウタリアン「セイ、すごいな！」

兎から弓を引き抜く。

ウタリアン「大きいイセボだな。苦しまずに一瞬で送れてやれてるし、はじめてにしては上出来だ。」

セイ「ありがとう」

微笑むウタリアン。

ウタリアン「帰ろうか」

○コシヤマインのコタン

ミナたち女性陣が、貝包丁で粟や黍やヒエを採集している。

ウタリアンOFF「おい」

声のする方を振り返るミナ達。

手を振るウタリアンと後ろを歩くセイ。

ミナ「ホシピアン（おかえり）」

二人の方に走るミナ達。

ウタリアン「見てくれ」

セイが兎を見せる。

ミナ「大きい！」

ウタリアン「大きいイセポだろ」
ミナ「初めての狩りでイセポ仕留めるなんて凄いなセイ」
セイ「兎は得意なんだ」

褒められて照れるセイ。

笑い合う皆。

ウタリアン「じゃあ準備しようか」
ミナ「私たちは皆を呼んで来ますね」
ウタリアン「よろしく頼む」

セイを見て
ウタリアン「セイはこっち」

食料保存用のチセに向かう二人。

○食料保存用のチセ

敷物の上に鹿を置くウタリアン。
ウタリアン「隣にイセポを置いてくれ」

兎をその横に置くセイ。

奥の方からイナウと酒を持ってきて供える。

ぞろぞろとコタンの人達が集まってきて、お供え物を持ってくる。

それぞれ座る。

コシャメインがカムイノミ（神に祈る）をする。

終わるとぞろぞろと帰る。

コシャメイン「セイ。よくこんな大きいイセポを獲れたな。
初めてにしては上出来だ」

セイの頭を撫でるコシャメイン。
セイ「ありがとうございます」

チセを出すコシャメイン。
ウタリアンOFF「はい」

セイにマキリ（小刀）を渡す。
ウタリアン「やったことあるか？」

首を横に振るセイ。

ウタリアン「まずイセポの解体からしよう」

兎をつかむウタリアン。

自分の首を指さし

ウタリアン「まずはここをマキリで切る」

兎の首にマキリを入れ、切るセイ。

血しぶきが上がる。

セイの顔に血が付着する。

ウタリアン「切り方上手いな」

セイ「だいたい、どこを切ればいいかわかる」
ウタリアン「じゃあ次は皮を剥ごうか」

解体して肉と皮に分けられた兎。

ウタリアン「次は鹿をやろう」

鹿の角を切るセイ。

ウタリアン「鹿の角はあとでミナと所に持って行ってくれ。薬に使うんだ」

興味深そうに

セイ「わかった」

嬉しそうなウタリアン

ウタリアン「セイは、ここに来る前どういう生活をしていたんだ」

セイ「ウタリが想像しているものよりも全然いいものではなかったんだ。

毎日が本当につまらなくて。でもレラって子に出会ってから、毎日が

本当に楽しかった。毎日が色づいていた。レラといった場所、感じた感情、
全部憶えている」

懐かしくも切ない気持ちになるセイ。

ウタリアン「…その子も幸せだな。セイにそんなに思われて」
セイ「そうだいいいな」

微笑み合う二人。

ウタリアン、鹿肉を切る。

ウタリアン「はい。これ食べてみて」

セイ「う…。うん。いただきます」

セイ「…！美味しい」

ウタリアン「だろ？」

セイ「鹿は食べたことなかったから、すごい好きになった」
ウタリアン「それはよかった」

笑い合う二人。

○同／食料保存チセの外

ウタリアン「じゃあまたなあとで」

セイ「うん」

お互いのチセに帰る。

○ミナのチセ

セイ「ミナ」

返事がない。

セイ「ミナ」。鹿の角持ってきたけど…」

奥の方で寝ているミナ。

鹿の角を置く。

少し寒そうにしているミナにルウンペを掛ける。

頭を撫でる。

微笑ましくミナを見て、コシヤマインのチセに向かうセイ。

○コシヤマインのチセ

夜

食事の準備をしている村人たち。

コタンC「あれ。ミナは？」

セイ「寝ています」

コタンD「そのまま寝かせてあげて」

セイ「…はい」

囲炉裏を囲み、炉縁に食器を並べる。

ヒシルエがみんなの食器をもらい、窯から食材を移す。

コシヤマイン「ヒンナ（いただきます）」

皆「ヒンナ」

ご飯を食べ始めるみんな。

ご飯を食べるセイ。

考える

セイ「…？」

コシヤマイン「その魚食べたことないだろ」

セイ「はい。はじめて食べます」

コシヤマイン「これはシペといってカムイが我々に与えてくださった大切な魚なんだ。もうすぐ川に戻ってくる時期だから今回はセイも一緒に漁に行こうか」

セイ「はい。ぜひ」

ウタリアン「楽しみだな」

セイ「うん」

ご飯を食べながら

コシヤマイン「今日、ウカウ・シラルのやつから聞いたが、またシサムとの揉め事があったらしい」

ヒシルエ「またですか…」

セイ「何か揉め事があったのですか？」

コシヤマイン「…数か月前にウカウ・シラルのコタンでシサムとマキリの切れ味で口論になって、殺された者がいたんだ。その後から、他のコタンでも、シサムとの口論が後を絶たなくなっ、交易でシサムが制限したりしてきたんだ。我々に必要な鉄や儀式に使う物、沢山の物をシサムに頼っている。不平等な条件にも我慢せざるを得ないが、度々こういう口論が起きるんだ」

セイ「…」

コシヤマイン「シサムに対する不信感が高まっているから、他のコタンに

行くことがあれば、セイ。注意するように」

セイ「はい」

ウタリアン「もし、用事があれば言ってくれば一緒に行こう」
セイ「ありがとう。ウタリ…」

○コシャマインチセの外

ミナの食事をもって、外にでるセイ。

檻の中の熊がセイに近づく。

恐る恐る熊を撫でる。

セイに甘える熊。

苦笑いをしてミナのチセに向かう。

○ミナのチセ

セイ「ミナ」。起きてる？」

ミナ「ん…」

起き上がるミナを慌てて支えるセイ。

ミナ「ありがとう。もう、みんなご飯食べた？」

セイ「うん。これミナの分。食べれる？」

ミナ「うん。ありがとう」

ご飯をゆっくり食べるミナ。

セイ「大丈夫か？」

ミナ「時々あるの。寝てればすぐ治るんだけど」

セイ「力の代償か？」

ミナ「多分そうだと思う」

セイ「…」

ミナ「そんなに氣を落とさないで。大丈夫だから」

セイ「うん…」

ミナ「そうだ。一緒にユー（温泉）に入らない？」

セイ「ユー？」

ミナ「あれ？あなた達の言葉で、暖かい水に入る事をユーと言わないの？」

セイ「…湯？」

ミナ「うん！近くに湯があるから一緒に行かない？」

セイ「いいね」

ミナ「よいっしょ。」

よろけるミナ。

ミナ「おとと」

ミナを支える

セイ「大丈夫か！」

ミナ「寝すぎたかも。行こうか」

セイ「でも、まずこれ食べて精をつけて」

ミナ「ありがとう」

ご飯を食べるミナ

○温泉

温泉のそばに、イナウと酒を捧げるミナ。

ミナ「ワツカウシカムイ エンキプヌイケシ（水の神様 私を助けてください）」

モレウを着て、温泉に入るミナ。

ミナ「セイ。そのテパ（禪）を着たまま入ってきて」

持っている新品の禪に履き替えて温泉につかるセイ。

セイ「はああああ」

ミナ「気持ちいい」

セイ「うん」

ミナ「時々、気分が良くない時に入りに来るの。ほら、湯って薬とも言うんでしょ？」

セイ「そうだな」

ミナ「それに、ワツカウシカムイ（水の神様）に助けて貰ってる気がするの」
セイ「その通りだな」

空を見上げる二人。

さそり座を指さし

ミナ「あ！ホヤウ！（竜）」

セイ「ホヤウ？」

ミナ「えーと…。シサム達がカムイとして崇めてる…」

がおおと竜のポーズをとるミナ。

セイ「獅子？」

ミナ「ううん」

ミナ「違う」
セイ「龍？」

星を指さしながら
ミナ「そう！あそこが、目で、あそこからまっすぐ伸びてるのが胴で
あそこら辺が手で」
セイ「ううん：わからない」
ミナ「そうか：あ！その下は、タマサイノチウウ（首飾り座）だよ」

脱いだルウンペの上にある首飾りをセイに見せる。

星をもう一度見ながら
セイ「わからないかも」
ミナ「そっか：」

残念という顔をするミナ。

セイ「ミナ星見るの好き？」
ミナ「うん。好き。セイは？」
セイ「変わらない景色を見るのは好きじゃなかったんだけど、親友と見た星は凄
く綺麗で、今でも鮮明に憶えてる」
ミナ「そっか。私もその景色見てみたい」

空を見ながら

セイ「いつか一緒にみよう」
ミナ「うん：見れるといいな」

空に流れ星が流れる。

○コタン

1月

雪が降り積もるコタン。

○コシヤマインのチセ

イオマンテ2週間前

イオマンテの準備で男性はイナウなどの用具、女性には酒造りや
ご馳走づくりをしている。

セイもウタリアンの指示の元手伝いをしている。

○コシャマインのチセの中

イオマンテ前日

儀式用の衣装に着替え、それぞれ指定の位置に着く。

チエホロカケプ（逆さに削ったイナウ）を立てるコシャマイン。

酒漉しの前に祈りが捧げる。

酒漉しの儀を行う。

村人総出でセイも教えて貰いながら行う。

莫塵を引くヒシルエ。

イオマンテ用に仕込んだ酒の中からオキ（炭）を取り出すコシャマイン。
取り出したオキを炉の中に戻し、火の神（アペフチカムイ）に感謝の
祈りを捧げる。

別の樽にサケヌンパニ（棒を4本「井桁」に組んだもの）を
置きザルをのせる。

仕込んだ酒をサケピサツク（柄杓でザル）にあげる。

ザルにあけたもろみを、手で擦り込むようにして漉す。

ザルをゆすつたり、ザルの底をこすつたりもする。

パツチ（器）を用意する。

シラリ（酒粕）はパツチに盛る。

ザルは洗わずに戸口に持っていき、戸口のそばの守り神である
アパサムシペカムイに祈りを捧げながら、ザルを当てて、
付着した酒粕を落とす。

その後道具を洗う。

○コシヤマインチセ／玄関

酒漉しに使ったザルなどの道具を洗い終わったタライの水を
玄関先にまく。

水をまいた村人たち「戸口の神様も、近くを往来する神様も飲みたい神様が
いたら、どうぞみんなで分けて飲んでください。」

○コシヤマインチセ

再び樽をゴザで覆い、神窓の左座に置くセイ。

拍手を貰うセイ。

照れ笑いをするセイ。

○同／熊の檻の前

夜

熊の檻の前で豪華なご飯を食べる熊を見ているセイ。

セイ「今日でお前ともお別れか。カムイモシリ（神の国）に帰るんだろう。」

悲しそうに熊の方を見るセイ。

ご飯を食べるのを辞めて、セイの方に近づく熊。

セイ「…」

熊を撫でるセイ。

セイ「もし向こうで、レラっていう女の子に会えたら、セイは元気だよって
伝えてくれ」

ミナOFF「セイどこいった」

セイ「はーい！またな」

チセの中に戻るセイ。

○コシヤマインチセ

ミナ「セイ。こっち」

ウタリアンの横に座るセイ。

イオマンテ前夜祭

イヨマレクル（酒を注ぐ人、女性が行う）が酒樽から酒をエトウヌプ（片口）に移す。

それを持って祭主の所に行き、トウキに酒を注ぐ。

続いてシソ側に座る人に注ぎ、次にハラキソ側の人に注ぐ。

コシャマインがシラリ（酒粕）をチエホロカケブイナウ（逆さイナウ）とイヌンパストウイナウ（酒漉しイナウ）の頭に載せる。

同じく対面に座る男性がイヌンパストウイナウにシラリ（酒粕）を載せる。

アペフチカムイにパスイ（捧酒箸）でシラリを捧げる。

コシャマインがトウキ（お椀）を持ち、キケウシパスイ（捧酒箸）の先に酒をつけ、アペフチカムイに捧げながら祈る。

他の男性たちも同様にイクパスイに酒をつけ、上座に置かれたイナウなどに捧げながら祈る。

祈りの途中、ウタリアンがチセコロカムイ（家を司る神）、イレスプンキヨカムイ（家族を育て見守る神）、イソプンキヨカムイ（漁獵を見守る神）のところに行って祈る（北東の角）。

セイがアペオイ（炉）に立てられたイヌンパストウイナウを2本持ち、アパサムシカムイ（戸口の神）に捧げる。

他の人は、祭主から命じられた重要な神々にその場で祈りを捧げる。

○コシャマインチセ外

祈りが終わると、ウタリアンとセイが外に出てロルンプヤラ（東窓）の前に行く。

他の男性がロルンプヤラ（東窓）からキケバラセイナウ、キケチノイエイナウ、イクパスイ（捧酒箸）、酒の入ったトウキ（お椀）各1個をロルンプヤラ（東窓）からウタリアンとセイに手渡す。

二人はオンカミ（拝礼）しながら受け取り、ヘペレセツ（子熊の檻）へ

向かう。

上部に上がる。

ヘペレセツ（子熊の檻）の横木に向かつて、左側にキケパラセイナウ、右側にキケチノイエイナウを立てる。

○コシヤマインチセ

コシヤマインコタンの男性がイナウキケ（削りかけイナウ）を手に取る。
ロルンプヤラ（東窓）上部の両端、アペオイ（炬）の中央部など、主だった所に結び付ける。

ヘペレセツ（子熊の檻）にイナウをつけたウタリアンとセイがチセに戻る。

コシヤマインコタンの男性が古老たちに酒を注ぐ。

古老たちはその酒を飲む。

ヒシルエに渡す。

女性たちはアペフチカムイや炬鉤につけられたイナウなどに酒を捧げた後自分たちも飲む。

コシヤマイン「イレスカムイ。ウパセカムイ。アペフチエカシ。
ヌワンオロワノ ウポンノ ポンノ クイタクコロカ
タントアナクネ ニシパトウラノ タパンペネノ
ウパセカムイ ウコツチャケタ クイタクキナ
ウピリカアヌ アキパキワ タネオロワノ
ニサツタ パクノ アキチイノミ イノミ ネヤツカ ウネブ
ネヤツカカムイ ウタリ ウピリカヌカラ アキパキワ
アプンノ カネ
ホピタクニ インカラアンクニ アタナンアイヌ
アイヌネ マヌ プクネ プネ コロカ タパンペネノ クイ
エパキナ

（育ての神 重い神 火の媼神、翁神よ 昨日から 少しずつ
私は申し上げていますが 今日立派な方々と 私の甥たちとともに
（若い者たち）このように 重い神の おん前に 申し上げますから
よく聞いて下さって 今から 明日まで 私たちのする祈り 祈りでも
何でも 神々が よく見守って 下さって 無事に 終わるように

見守ってくださいるように ただの人間 人間というもので 私はあるが
このように 申し上げるのです。以下中略)

クイエ パ キ コロ クイタク オケレ クイエ ハウエネ

(申し上げて 私は言葉を収める のでございます)

立ち上がるコシヤマイン。

コシヤマイン「皆。今日は集まってくれて感謝する。明日からの

イオマンテのために今日は、食べて飲んで、宴を楽しもう
じゃないか。」

皆「おおー！！！」

コシヤマインのチセの中で、飲み食いする人たち。

クリムセ (弓の舞) を行う。

イヨマンテリムセ (イオマンテ踊り) をする女性たち。

○熊の檻の前

イオマンテ当日

ヘペレセツ (熊の檻) に上がるウタリアン。

カムイ (熊) の胴体と首にトウシ (網) を2本結びつける。

熊を檻から出すコシヤマイン

他のコタンからきた村人男たちとコシヤマインのコタンの村人男たちが
それぞれトウシ (網) をもって熊を囲むように配置し、
熊を中央にある、ヤシケオクニ (カムイを結ぶ棒) へと誘導。

セイとウタリアンと他のコタンからきた村人 (男) がそれぞれ
タクサ (お祓いの棒的な) を持ち、熊を囲いながら上下に振る。

時々、タクサ (お祓いの棒) を持った3人が、熊の顔や体に当てる。

その間女性たちが手拍子をとりながら「ホイヤーホッ、ホイヤーホッ」と
掛け声を発する。

熊をヤシケオクニに繋ぐ。

ヤシケオクニに繋ぐトウシは、後方のトウシを使用。

女性たちが熊を取り囲み、リムセ（輪踊り）を踊る。

輪の内側には、ヤシケオクニに繋がれた熊、前方の2本のトウシを持った男性、タクサを持ったウタリアンがいる。

熊とヤシケオクニを繋いでいたトウシを解き、会場を歩かせる。

ロルンプヤラ（東窓）の下を通って、ポンヌサの横に座っている古老の手前まで行き、そこで方向を変え、ヌサの前を通ってヤシケオクニまで行く。

このルートを何度か周る。

女性たちの掛け声はウポポ（歌）に変わっている。

3回目に熊が古老の近くに来た時、古老たちは熊にへペレアイ（花矢）を射る。

興奮する熊。

往復しているうちに、だんだん熊が疲れて動きが鈍くなってくる。

頃合いを見計らって、ヌサの前にトドマツの枝葉を敷いて、その上にイヌンパニ（熊の息の根を止める丸太）を置く。

熊をうつぶせに寝かせ、首をイヌンパニの上にのせ、両手も前方にのばしてイヌンパニの上に置く。

イヌンパニのもう一方の木を首の上に渡し、男性たち（コシヤマイン、他のコタンの村長）が左右3人ずつのって首をしめ、絶命させる。

○コシヤマインのチセの中

解体された熊が安置された場に古老が座り、カムイノミ（祈り）が行われる。

集まった人々に食べ物や飲み物が振舞われ、饗宴がはじまる。

沢山の人達の笑い声と歌。

宴会中、ミナがセイを外に行こうと誘う。

○コシヤマインのチセの外

雪の中を歩く二人。

身震いをする。

セイ「んん…」

ミナ「寒いな」

セイ「うん」

セイ「それにしても、凄いな。イオマンテ？だっけ」

ミナ「うん。キムンカムイ（熊の神）への感謝と再訪を願う大切な儀式なの。

私もあまり経験がないんだ」

セイ「そうなんだ」

ミナ「セイがいた所にもあった？」

セイ「隣村に神社、神様が祀られている社があつて、毎年そこで大きいお祭りがあ
るよ」

ミナ「へー。きつと素敵なんだろうな」

セイ「神輿っていう神様の乗り物を担いで、村中を回るんだ」

ミナ「実際に見てみたら、迫力がありそう」

セイ「本当に凄いよ！何年前からあるんだろうって思うくらい古くて、
でも鮮やかで、こーんなに大きい」

笑うミナ。

ミナ「もつともつと、セイの居た村のこと教えてよ」

セイ「いいよ。それでね、ここには無い野菜もあるんだ。

色鮮やかで、身がふっくらしていて」

ミナ「美味しそうだね」

セイ「とっても美味しいよ」

二人の笑い声。

夜空で星が輝く。

○コシヤマインのチセの外／シンヌラツパヌサの前

イオマンテ翌日の儀式が執り行われている。

男性たちが座り、トゥキ（お椀）に入れた酒をイクパスイ（捧酒箸）の先に
つけ、前方、横、後ろ、三方へ振り撒くようにして捧げる。

トゥキ（お椀）に入れた酒をイクパスイ（捧酒箸）の先につけ、前方、
横、後ろ、三方へ振り撒くようにして捧げるセイ。

合掌し祈るセイ。

女性たちも続いて、ご飯や団子、果物などをちぎって前方に撒くように
して供える。

○コシャマインのチセの中

カムイノミ（祈り）のために、炉を囲んで座る人々。

拍手喝采。

コシャマイン・ウタリアン・ヒシルエ・ミナと他コタンの村長達が残り、
炉を囲む。

とても重苦しい空気を横目にチセに帰るセイ。

○ミナのチセ

寝る準備をするセイ。

コシャマインOFF「セイ」

コシャマインとミナが立っている。

コシャマイン「こんな時間に申し訳ないが、ちょっといいか？」
セイ「はい」

外に出るコシャマイン。

追いかけるセイ

○コシャマインのチセ

炉を囲んで座る二人。

コシャマイン「疲れているところ、申し訳ないな」
セイ「いえ」

コシヤマイン「ここでの生活はどうだ？セイの旅の答えは見つかったか」
セイ「ここでの生活はとても楽しいです。旅の目的も忘れてしまうほど」

切なそうに笑うセイ。

コシヤマイン「そうか。」

一呼吸おいて

コシヤマイン「だが、もう村に帰った方がいい」

セイ「…。なぜですか」

コシヤマイン「雪が完全に溶けたころ、私たちはシサムに対して戦いを挑むことを決めた。ウカウ・シラルのコタンだけでなく、秘密裏に情報を共有し、一斉にシサムの館に攻撃をする。

セイ。お前を戦いに狩りだそうなどは考えていない。

ただ、ウタリもミナもこの戦いに行く。いつ帰って来れるかも生きて帰って来れるかもわからん」

悔しそうな顔をするセイ

コシヤマイン「遅かれ早かれ、いつかは起こることだったのだ。

セイには辛い思いをさせてしまう。だから、皆が戦いに行く前にここを去った方がいい」

セイ「…女のミナも戦いに行く必要はあるのですか」

コシヤマイン「ミナには戦士の治療をしてもらう必要がある」

セイ「そうしたら、ミナが死んでしまうではないですか！」

黙るコシヤマイン。

悔しそうに

セイ「コシヤマイン様は知っていたんですね。ミナが自分の體を犠牲に

あの力を使っていることを」

コシヤマイン「私だけではない。コタンの皆、知っている」

セイ「なのにミナの治療を止めなかったのですね…。利用していたのですか」

コシヤマイン「そんなことはない！仕方がなかったんだ！」

コシヤマインの胸ぐらをつかむセイ。

ミナOFF「セイ！」

怒りの表情でセイを見つめるミナ。

手を下すセイ。

ミナ「コシヤマイン様、申し訳ございません」
コシヤマイン「いや。いいんだ」

セイ「…」

セイの手を引っ張り、どこかに連れて行こうとする。
ミナ「…」

セイの腕を掴み

コシヤマインOFF「待て」

腕を振り払おうとするが、コシヤマインの力が強く、腕が抜けない。
コシヤマイン「いいか。ここに残ればきつと、辛い思いをする。

戦が始まる前に、ここを去るんだ」

悔しそうに

セイ「…」

手を振りほどき、ミナに引っ張られる。

○川のほとり

セイ「ミナ！」

立ち止まるミナ。

ミナの肩を掴みながら

セイ「ミナ。ここから逃げよう。戦になんて行っちゃダメだ」

ミナ「…」

セイ「今まで、ずっと村の皆のために自分の體を犠牲にして、戦にまで行くな
て、そんな酷いことないじゃないか。もう逃げようミナ」

ミナ「…私が行くって言ったの」

セイ「なんで…」

ミナ「コシヤマイン様に救って貰ったあの時、私はこの體をコシヤマイン様に
捧げると誓ったの」

セイ「それでも、今のミナの状態だったら…」

言わずらそうに

セイ「もう帰って来れないじゃないか…もう親友が死ぬところを見たくないん
だ…」

セイを抱きしめるミナ。

ミナ「セイには辛い思いをさせてしまうことはわかってる。ごめんね。
でも、私ね。セイと会う前は、體がどんどん衰えていくことを感じて

いつ死ぬんだろう、お父さんとお母さんにいつ会えるんだろうって
そんなことばかり考えていた。
でも、セイが来て、毎日が凄く楽しくて、知らないことを沢山知れて、
世界はこんなに広いんだって思えた。
コシャメイン様に戦のことを知らされて、残るか行くか聞かれた時に、
一瞬、死にたくない。セイともっと一緒に居たい、色んな所に行きたい
って思ったの。私の心は、こんなにも人間らしくなっちゃったんだって」

セイを見るミナ。

涙を流しながら

ミナ「そう思えただけでも、幸せなの」

泣きながらミナをまた抱きしめるセイ。

泣き合う二人。

× × ×

二人で寝転んでいる。

セイ「ミナ」

ミナ「なに？」

セイ「やっぱり、行かないって選択肢はもうないか？」

ミナ「うん。最後までコシャメイン様達と戦う」

セイ「そっか：悔しいけど尊重するよ。ミナがそう決めたなら」

ミナ「ありがとう。でもセイは帰っても良いんだよ」

セイ「ううん。帰らない。ミナ達が帰って来るまで、見届けたい」

ミナ「：ありがとう」

抱き合って寝る二人。

○回想（戦までの思い出）

○チセの外

お昼

子供たちとアカムカチュ（輪突き）で遊ぶセイ達。

○女性のチセ

女の人達の刺青に立ち会うセイ。

痛そうに女たちを見るセイ。

○妊婦のチセ

出産に立ち会うセイ達。

コシヤマイン以外は外に出て見守っている。

子供が生まれて喜ぶ皆。

○コシヤマインのチセ

男たちが戦用の矢をつくる。

毒づくりをするセイ達。

トリカブトの葉の上に乾燥させたトリカブトの根の一部を乗せ、舌に乗せるウタリアン。

ウタリアン「うん」

セイも同じようにやる。

舌がピリピリして身震いをする。

セイ「これは…きついな」

ウタリアン「ハハハ。更にもっときつくするからな」

乾燥したトリカブトの根を砕き、水分を加え泥状にする。

作られた矢に毒を塗っていく。

○コシヤマインチセ

昼

ヒシルエ達とお守りをつくる。

○同

夜

「ご馳走と酒で盛り上がる村人達。

舞を舞う女性たち。

ミナとセイの笑い合う姿。

○コシヤマインのチセの外

早朝

大量の弓と毒と食料を持って、チセから出るコタンの人達。

全員新品のルウンペを着て戦に行く人達が並ぶ。

コシヤマイン「私らが居ない間、このコタンを頼んだよ」

頷くコタンの人達。

コシヤマインにお守り袋を渡すヒシルエ。

ヒシルエ「必ず戻ってきてくださいね」

コシヤマイン「ああ」

ヒシルエを強く抱きしめるコシヤマイン。

他の女性たちも、男性たちにお守り袋を渡し、抱き合う。

お守り袋をウタリアンに渡すセイ。

セイ「絶対に帰って来い：」

セイの頭を撫でながら

ウタリアン「しめっぽい顔するな。絶対帰る」

ミナの前に行くセイ。

エカエカ（女性用のお守り）を渡す。

セイ「ヒシルエ様と一緒に編んだんだ」

エカエカを受け取り、手首に巻く

満面の笑みで

ミナ「ありがとう！」

セイ「ミナ。さよならじゃないよ。待ってるから」

少し寂しそうに

ミナ「うん」

コシヤマイン「セイ。君は亡くなった親友との約束がある。危険だと思ったら、

すぐに帰るんだ」

セイ「はい。でも、皆さんの帰りをここで待ってます。」

コシヤマイン「必ず戻ってくる」

セイの頭をぐしゃぐしゃと撫でる

戦に行く人達が並ぶ。

コシヤマイン「行ってくる」

志海苔館に向かって歩くコシヤマイン達。

子供がお父さんに向かって走ろうとする。

コタン子C「待ってー！」

コタンC「ダメよ！」

子供を引っ張る。

戦に行く皆を見送るセイ達。

○志海苔館付近

T「1457年5月17日」

早朝

大軍を率いて志海苔館の付近へと進むコシヤマイン一行。

歩みを止め、ウタリアンが矢を志海苔館に向けて放つ。

コシヤマイン「我々はカムイと共に！」

怒号と共に一気に志海苔館に攻め入る男たち。

○志海苔館外

怒号を聞いた館兵たちが慌てて日本刀を取り出す。

和人A「お主ら蜂起とは何事じゃ」

弓矢で殺される和人A。

和人B「おのれ」

日本刀を取り出し襲いかかろうとするが、弓矢で殺される和人B。

館内に攻め込むアイヌ達

木陰でケガした兵士の治療にあたるミナ。

ケガが治るとすぐに戦に向かう兵士たち。

○志海苔館中

コシヤマインとウタリアン達が小林良景のいる間に着く。

小林良景と配下が立っている。

小林良景「やあやあ。吾こそは、北条の被官として津軽に來住し、

志海苔館の館主をめえぜられた、小林太郎左衛門尉良景

(こばやしたろうさえもんのじょうよしかげ)なり腕に覚えの者よ、

手合わせ願う！」

コシヤマイン「吾は、ウスケシのコタンコロクル(村長) コシヤマイン。

殺された同士の恨み。ここで果たす！」

コシヤマインと小林良景の一騎打ち。

ウタリアンとその他アイヌの兵士と小林の配下での一騎打ち。

○志海苔館の外

アイヌ達と和人の争い。

必死に兵士のケガを治すミナ。

アイヌ兵士を切りながら

和人C「こんなに手ごわいなんて聞いておらんぞ」

和人D「特にあの毒矢は危ないぞ」

周りを見渡しながら

和人C「なぜ、一向に数が減らんのだ」

和人Cが切ったはずのアイヌ兵士が完治して戦いに出ているのを見て
疑心に思う。

和人C「あいつ、さっき切ったはずでは」

和人D「どうなっているんだ」

不思議な力で治療するミナを見つける和人D。

和人D「あ、あそこに、奇妙な能力で治療をするおなごがおるぞ」

目を細めてミナの方をみる和人C。

和人C「なんだあれは！」

和人D「おなごを殺すには少々気分が悪いが」

ミナに向かって刀を抜く和人D。

目をつむるミナ。

刃物が止まる音がして目を開けるミナ。

アイヌの2人がミナをエムシ（刀剣）で守る。

アイヌA「ここは、任せて治療に専念するんだ」

ミナ「ありがとうございます」

戦う和人CDとアイヌAB。

どんどん激戦化する戦場。

○コシヤマインのチセ

夜

レラの形見のお守りを持って、皆の帰りを祈るセイ。

空を見上げるセイ。

志海苔方面から上がる煙。

T「1458年12館のうち残り2館」

○七重浜付近

6月下旬

昼

武田信広とその配下達に攻め入られるアイヌの兵士達。

アイヌC「コシャマイン様、ウタリアン様、ミナ様。ここは、私たちが引き留め

ますので、早くお逃げください」

ミナ「ケガ人はどうするのですか」

アイヌD「ケガ人のことは後回しで良いのです。どうかコシャマイン様達を
お守りください！」

悔しい顔をするミナ。

ウタリアン「ミナ。行こう」

ミナ「…」

ミナの手を引っ張って、七重浜に向かって走る。

足がおぼつかないミナ。

セイから貰ったお守り袋が落ちる。

○七重浜

三人が七重浜に追いつめられる。

武田信広が馬に乗って、三人を追いかけてくる。

馬から降りる武田信広。

じりじりと近づく武田信広。

武田信広「吾は花沢館・館主蠣崎季繁様（かきざきすえしげ）から

お前たちを鎮めるために名を賜った、武田信広なり。

不思議な力を持つおなごよ。私は、女を殺す趣味はない。立ち去れ。」

ミナ「…この體はコシャマイン様に捧げると決めた。命尽きるまで私は戦う」

武田信広「…。なら、覚悟を決めろ」

ミナに向けて矢を向ける武田信広。

武田信広に向かってエムシ（刀剣）で切りかかろうとするウタリアン。

ウタリアンに向けて矢を射る武田信広。

心臓に矢が刺さるウタリアン。

ミナ「ウタリアン様！」

急いでミナがウタリアンを治す。

一命をとりとめるウタリアン。

血を吐いて倒れるミナ。

ウタリアン「ミナ！」

血を吐きながら

ミナ「ウタ…リ…」

ウタリアン「もう何も話すな！」

ミナ「い…きて…」

絶命するミナ。

ウタリアン「ミナ。ミナ！ミナ！」

武田信広に向かって矢を放つウタリアン。

刀を交わっていたコシヤマインを突き放し、飛んできた矢を刀で切る
武田信広。

ウタリアンに向かって弓を放ち、絶命させる武田信広。

後ろから来たコシヤマインが放った矢も短刀で切る。

コシヤマインにも弓を放つ。

コシヤマイン、ウタリアン絶命。

馬の方に戻り、馬に乗って、元の道に戻る武田信広。

○同

空が夕暮れになり、夜になる。

武田信広の奇襲に難を逃れたアイヌの兵士達が、七重浜で三人の死体を見つける。

アイヌE「コシャマイン様！」

アイヌF「息はあるか！」

アイヌE「ない…」

アイヌG「ウタリアン様もミナ様にも息がない」

アイヌE「くそっ…」

悔しがるアイヌの兵士達。

アイヌH「ここで悲しんでいる場合じゃない！ここは俺たちに任せてお前たちは、コシャマイン様達を、コタンに運べ！」

頷くアイヌEFG。

それぞれ、コシャマイン、ウタリアン、ミナの死体を担いで、ウスケシに向かう三人。

アイヌH「コシャマイン様達の命を無駄にするな！最後の力を振り絞れ！」
兵士達「おお！」

茂別館に向かうアイヌの戦士たち。

○コシャマインのチセ

三日後

畑に生えている粟、ヒエなどを採取しているセイ達。

コタン女Aがミナ達の死体を担いで、帰ってくる三人を見つける。

指をさしながら

コタン女A「ちよつと。あれ…」

振り返るセイ。

ミナ達の死体を担いる三人。

セイ「ミナ…！」

道具を捨て三人に駆け寄るセイ達。

コタンC OFF 「ヒシルエ様！」

ヒシルエ達を呼びに行くコタンC。

ミナ達の死体を土に置く三人。

アイヌF 「間に合わなかった…」

セイ「ミナ。ミナ…」

遅れてヒシルエ達が駆け寄る。

ヒシルエ「あ…ああ」

コシヤマインとウタリアンの亡骸に顔を伏せて、声を上げて泣く
ヒシルエ。

それを見て泣く皆。

ミナの腕にエカエカがなく、お守り袋もないことに気づく。

セイ「お守り…どこに落としたんだよ…」

ミナのルウンペに血がついているのを見るセイ。

セイ「痛かったよな。苦しかったよな。よく頑張った。おかえり。帰って来れて
良かったな」

声を上げて泣くセイ。

皆で声を上げて泣く。

○コシヤマインのチセの中

夜

左側の炉の下手に、頭を上手側に向けて、仰向けに安置されてる
三人の死体。

死者には、一番高級な冬服のルウンペを裏表逆に着せられ、
白い布が顔にかけられる。

ミナの胸にはタマサイ（ネックレス）が置かれている。

一札をして泣きながら死体の肩から胸を撫でるコタンの人々。

ミナの肩から胸を撫でるセイ。

声を出すのを我慢して泣くセイ。

○コシャマインのチセの中

翌日の昼

ご馳走が並ぶチセ内。

正装を身につけられている三人。

レクトウンベ（魔除けの首飾り）を付けられる。

死体を包む用の莫座で死体を包み七本の木製の止め串に紐を引っ掛け、紐が交差するようにして縛った後、特別に編んだ紐でゆるく結ぶ。

別の紐で棒に繋ぐ。

家の戸口から、死者の足から先に出す。

○チセの外へ墓地

クワ（墓標）を持った人↓死体を運ぶ人↓副葬品を持つ人↓村人たちの順で、墓まで歩く。

ヒシルエはコシャマインの墓標、セイはミナの墓標を持つ。

ヒシルエは、頭を丸刈りにし、チシコンチ（泣き頭巾）を被って着物は裏返しの状態になっている。

身長と同じサイズに掘られた穴に死体を入れる。

副葬品はその場で乱暴に鎌で壊してから入れる。

村人たちが土を被せる。

最後に、クワ（墓標）を持つヒシルエとセイが、墓に刺す。

墓の上から水をかける村人たち。

古老がヨモギと笹の葉の束を激しく振りながら「フッサ、フッサ！」と大きな呪声をかける。

一礼してチセへ戻る村人たち。

後ろを振り返ろうとするセイ。

ヒシルエ「振り返ってはダメ」
セイ「…」

悲しい顔をするセイ。

チセへと戻る村人たち。

○ミナのチセ

夜

酷く落ち込むセイ。

シャナOFF「セイ様」

振り返るセイ。

シャナ「何も聞かず、冬服に着替えて付いてきて下さいませんか」
セイ「…うん」

○山

獣道を進むシャナとセイ。

洞窟へとたどり着く。

油を付けた木に、石をカチカチと擦り、摩擦で火をつける。

洞窟に入る二人。

○洞窟の中

どんどん歩いていくシャナとセイ。

壁には、古代の絵や象形文字が描かれている。

歩みを止めるシャナ。

シャナ「私は、ここから先には行けません」

セイ「…」

シャナ「この先には、死者が行く。ポクナモシリの入り口があります。きっとミナ様達が居るはずです。

そして、これだけは守って下さい。向こうの食べ物は一切口にしないです。いけません。あと、あまり長居はしないで下さいね…」

ぺこりとお辞儀して、元来た道を帰ろうとするシャナ。

セイ「シャナ！」

振り返るシャナ。

セイ「ありがとう」

笑みを浮かべるシャナ。

シャナ「ミナ様によろしくお伝えください」

ぺこりとお辞儀して歩みだすシャナ。

○同／洞窟の奥

だんだんと天井が低くなる洞窟を歩むセイ。

四つん這いにならないと歩けなくなる。

奥から段々と光が見えてくる。

時折、冷たい冬の風が吹く。

セイ「寒い」

四つん這いで進むセイ。

出口が見える。

洞窟を出る。

○ポクナモシリ

昼・冬（生きてる世界とは逆）

一面雪景色で驚いて立ちすくむセイ。

勇氣を出して進む。

○同／川のほとり

コシャマインのコタンに似ている雰囲気を感じる。

ミナと思わしき人物が、水を汲んでいる。

セイ「ミナ！」

ミナに近寄る。

声に振り向くミナ。

ミナ「セイ……？」

セイ「ミナ！セイだよ！セイ！」

ミナ「セイ？本当にセイなの？」

セイ「もしかして姿が見えてないの？」

ミナ「うん。どこにいるの！」

生きてる人の姿は死者には見ることができない。

悲しい表情を浮かべるセイ。

戦死したアイヌA「おい。ミナ。誰と話しているんだ」

ミナ「ごめんなさい。独り言！」

ミナ「：セイ。こっち来て」

セイ「うん」

川の向こう側にある草むらに向かう。

○川付近の草むら

ミナ「ここなら、誰にも見つからないでしょう」

岩に腰掛けるミナとセイ。

ミナ「本当にセイなんだね！姿は見えないけど、声で直ぐにわかったよ」

セイ「ちょっと疑ってたくせに」

拗ねるセイ。

ミナ「ごめんごめん。だって、声だけだから、悪霊だったら嫌だって」

むすーと拗ねるセイ。

ミナ「でも、セイどうやってここに来たの？」

セイ「シャナが連れて来てくれたんだ」

ミナ「シャナらしいな」

ハハハと笑うミナ。

ミナ「セイとまた話せて本当に嬉しい。それだけが心残りだったから」

セイ「僕もミナと話せて嬉しいよ」

ミナ「コタンの皆は元氣？」

セイ「うん。元氣だよ。みんな頑張っって前に進もうとしてる」

ミナ「そっか：良かった」

黙る二人。

ミナ「すごい怖かった。見たこともない武器で皆切られてしまっって、治療が遅れた人たちが皆死んでしまっって」

黙っって聞くセイ。

ミナ「シサムの主将に私だけ立ち去れっって言われた時、一瞬、コシャマイン様とウタリを見捨てて、コタンに帰ろうと思った。けど、最後まで戦ったの。ねえセイ。私頑張ったよね？」

泣きながらセイに問うミナ。

ミナを抱きしめるセイ。

セイ「頑張ったよ。ミナは本当によくやったよ」

ミナ「私達のしたことは決して無駄なんかじゃないよね」

セイ「うん。ミナの死も、ウタリの死も、コシャマイン様の死も。

自分たちの命をかけてこの誇り高き文化を守ろうとした皆の死は絶対に無駄なんかじゃない！」

ミナ「うん。うん。ありがとうセイ……」

涙を拭いてニツコリ笑うミナ。

ミナ「私、ここに来てから、目も視えるし耳も聞こえるようになって、すごく体調も良いの。少し、遊ばない？ 私セイと思いつきり走るのが夢だったの」

セイ「いいね」

立ち上がっって、走るミナ。

それを追いかけるセイ。

動物たちと一緒に走る二人。

× × ×

雪合戦する二人。

ミナに向かって雪を投げるセイ。

セイ「そりゃー!」

ミナ「きゃあ。セイどこだー!」

黙るセイ。

ミナ「ずるーい!」

セイ「アハハ」

笑い合う二人。

○洞窟の前

夜

セイ「もう行かないと」

ミナ「そっか。本当にお別れだね」

セイ「うん」

泣きそうになるセイ。

ミナ「セイ。私の顔と同じ目線になるまで、かがんでくれる?」

セイ「うん。いいけど」

かがむセイ。

ミナ「かがんだ?」

セイ「うん」

セイにキスをするミナ。

セイ「…!!」

赤面するセイ。

満面の笑みで

ミナ「一生忘れないお土産!」

セイ「絶対忘れない!」

振り返り、洞窟に向かうセイ。

セイ「ミナ！スイウヌカルアンナ（また会おうね）！」
ミナ「…！またね！」

笑顔で手を振る二人。

洞窟の方を見るミナ。

一瞬セイの後ろ姿が見える。

びっくりするミナ。

呟くように
ミナ「セイ。大好きだよ」

○洞窟中へとある村

元来た道に戻るセイ。

涙を拭きながら歩く。

歩くセイ。

時間が進み、時は現代。

夕暮れ時。

かつて祠が合った場所に稲荷神社ができている。

九本の尾を持ち、神として祀られているセイ。

山の上から、変わった街の風景を見るセイ。

レラの小屋があった場所は更地になっている。

悲しい表情を浮かべるセイ。

無縁仏化し、苔が生えるレラの墓に手を合わせるセイ。

○同／昔レラと星を見た山頂

景色を見て、思い伏せているセイ。

女子高生OFF「こんばんは」

驚いて振り返るセイ。

一人の女子高生が立っている。

女子高生「ここにこんな所があったなんて。」

セイ「私が見えるのか？」

女子高生「私、少しそういうの敏感なので。」

苦笑いをする。

女子高生「綺麗ですね、とっても」

女子高生「私ここに越してきたばかりなんですよ。転校生って珍しいから質問攻めにあっちゃって、なんかすごく疲れちゃいました。アハハ」

背伸びをしながら

女子高生「でもこの景色見たら疲れがふっとんじやいました」

セイ「：夜になると星が綺麗に見えるんだ。あの時と変わらず。」

空を眺めるセイ。

女子高生「よければ、一緒に見ませんか？星」

セイ「夜は危ないから帰った方がいいんじゃない」

女子高生「大丈夫です。親は帰りが遅いし、それに：」

カバンからビニール袋を出して

女子高生「お腹すいたから丁度おにぎりを二つ買ってきたんです。良かったら一緒に食べませんか？」

女子高生OFF「あ、でも神様は食べ物食べなくても生きていられるのか、じゃあ要らないか」

レラとの思い出を思い出してクスッと笑いながら

セイ「お供え物として、頂くよ」

ニコツと笑って

女子高生「良かったです」

セイにおにぎりを渡す腕に、ミナにあげたエカエカに似ているミサナがついている。

そのミサナがキラリと光る。

ED